

重複形容詞の構成

蜂 矢 真 郷

本稿は、疊語について考察した前稿(一)「語の文法的構成——疊語について——」、(二)「形状言の重複の一形態」、(三)「一部重複と縮重複」を受け、重複して形容詞化接尾辞シを伴い形容詞を構成したものの(以下、これを重複形容詞と呼ぶこととし、また、それに対して重複素が単独で同じくシを伴い形容詞を構成したものを仮に単独形容詞と呼ぶこととする)について述べ、また、その中で特異な位置を占めると見られるセハセハンについても考えようとするものである。

一

前稿(一)で述べたように、ク活用形容詞の語幹(例、ナガ)を重複してシを伴いシク活用形容詞(例、ナガナガシ)を構成することがあるが、ク活用形容詞の語幹を重複してシク活用の重複形容詞を構成するのであるから、シク活用形容詞の語幹を重複することがない

のはそれなりに当然であろうと考えられ、また、ここにシク活用形容詞の語幹としたのはシを含むものでありとりも直さず終止形であって、その重複は終止形の重複となりク活用形容詞の語幹の重複に引き比べられるものとはならないであろうと考えられる。つまり、とりあえず大づかみにとらえるならば、単独形容詞と重複形容詞との関係を考える時、重複形容詞はシク活用でありそれに対する単独形容詞はク活用のもを基本とすると見てよいであろう。

無論、シク活用形容詞の終止形(すなわち語幹)からシを除いたものとク活用形容詞の終止形からシを除いたもの(すなわち語幹)との間は基本的に差のないものとされ、後者の重複(例、タカタカニ)と同様に前者の重複(例、アラタアラタニ)の例もあり、また、重複形容詞の重複素はク活用形容詞の語幹に限られるものではないので、従って、右の前者を重複素とする重複形容詞がありえてよく、換言すれば、シク活用の重複形容詞に対する単独形容詞がシク活用

のものもありうるのである。そして、事実そのようなシク活用単
 独形容詞をとる重複形容詞がいくらかあるのであるが、その例は多
 くなく、また、後に述べるように、さらにそのうちのいくつかは除
 かれ、残るものもそれぞれ事情が考えられるものであって、やはり
 大筋としては先のようにとらえてよいかと思われる。

さて、上代・中古を中心とする重複形容詞を挙げてみよう。挙げ
 る基準としては、

(i) 『時代別国語大辞典上代編』が見出し語とするもの。

(ii) 源氏物語に用例のあるもの。

(iii) 類聚名義抄観智院本に例のあるもの。

をすべて採ることとした。^⑥

今、以下において、重複素の音節数にかかわらず、前項重複素を
 X、後項重複素をx、重複したものをXx、単独形容詞をXシ、重
 複形容詞をXxシと表わすことにしたいが、右によって挙げられた
 重複形容詞を分類すると、Xxシに対して、同じく(i)(ii)(iii)の範囲に
 おいて、

- (a) Xシ・Xxの例のともに見られるもの。
- (b) Xシの例が見られ、Xxの例の見られないもの。
- (c) Xシの例が見られず、Xxの例の見られるもの。
- (d) Xシ・Xxの例のともに見られないもの。

のように分けることができる。(i)(ii)(iii)の範囲にはXシやXxの例が
 見られないが、上代・中古の中で範囲を広げれば例の見られるもの
 や、形容詞の語幹の用法かと思われるものならば例の見られるもの
 は、右の(a)~(d)に準じて括弧に入れて示す。イ・ロ・ハの注記は右
 の(i)(ii)(iii)のいずれの範囲から採ったかを示すものである。

(a) ナガナガシ アアラシ ナホナホシ

(イ) (スガスガシ) (ラサラサシ) (モノモノシ)

〔カマカマシ〕^⑦

(b) ワカワカシ アアハシ コハゴハシ セバセバシ カルガ

ルシ ウトウトシ トホトホシ オモオモシ カロガロシ

(アダアダシ) オトナオトナシ (セハセハシ)

ケケシ (オホヤケオホヤケシ)

〔オホホシ〕^⑧

(c) シナジナシ キハギハシ ソバソバシ クマクマシ ムラム

ラシ キラキラシ (シラジラシ) スクスクン (コトゴトシ)

ホトホトシ イトドシ ヒトビトシ ホノボノシ オボオボシ

(ワキワキシ) ミチミチシ サキサキシ (ホレホレシ) (ユ

エユエシ)^⑨

(d) ハカバカシ マガマガシ ソガソガシ ヒガヒガシ クダク

ダシ イマイマシ ウヤウヤシ キヤキヤシ ワワシ カウガ

ウシ サウザウシ ヤウヤウシ サクサクシ ムクムクシ タ
 ズタヅシ ヤツヤツシ イイツシ ユユシ ココシ コゴシ
 オココシ カドカドシ タドタドシ オドロオドロシ ヲヲシ
 タイダイシ タギタギシ スキズキシ ツキヅキシ ヨシヨシ
 カヒガヒシ ウヒウヒシ ユヒユヒシ カケカケシ ナサ
 ケナサケシ ホケホケシ クセグセシ クネクネシ ムネムネ
 シ ヒネヒネシ ムベムベシ メメシ マメマメシ ハエバエ
 シ ナレナレシ ハレバレシ オレオレシ シレジレシ
 コチゴチシ ビビシ ラウラウジ ゲスゲスシ ザエザエシ

括弧内のものを含めて、(d)が53例と圧倒的に多く、(c)が19例、(b)が15例といずれも必ずしも多くはなく、(a)は7例とさらに少ない。^⑩
 また、(d)の範囲から挙げられたものが非常に多い。

さらに、重複素(X)の末音節に注目してみると、前稿(一)にも述べたようにア列・ウ列・オ列のものもイ列・エ列のものも存するが、右の(a)∧(d)の分類と合わせ考えると、(b)のケケン・(オホヤケオホヤケシ)、(c)の(ワキワキシ)・ミチミチン・サキサキシ・(ホレボレシ)・(ユエユエシ)を除いて、(a)∧(c)においては重複素の末音節はア列・ウ列・オ列のものばかりである。

例外となるもののうち、サキサキシについては、サキサキ(X₁X₂)は擬音語として用いられるもので(萬五〇三)、例外となるものには

重複形容詞の構成

(理由があると言えよう(前稿(一))。また、ミチミチン・オホヤケオホヤケン・ユエユエシの重複素(X)は名詞であり、ワキワキシ・ホレボレシの重複素(X)は動詞(連用形)であって、ここで重複素が名詞および動詞(連用形)のものが例外となることに注意する必要があろう。これらの重複形容詞は、重複することで名詞・動詞としてある重複素の各々を個別的にはなく共通の属性を抽出して包括的にとらえているものである(前稿(一)参照)。そして、独立して用いられるところの名詞・動詞(連用形)を重複素とする重複形容詞は、重複素の末音節が名詞および動詞(連用形)としての特徴を示しイ列・エ列のものもあると考えられる。なお、ケケンについては後述する。また、後述するケケンを含めて、例外となるものはすべて上代に例の見られないものようである。^⑪)

右に見た例外のものその他は、重複素の末音節がイ列・エ列のものはすべて(d)に属するが、それらは、漢語は別として、重複素が名詞のものや動詞(連用形)のものが多。^⑫名詞や動詞(連用形)を重複素とする重複形容詞については右に見た通りである。改めて(a)∧(d)を通してとらえれば、末音節がイ列・エ列の重複素は多くは名詞・動詞(連用形)のもので、それらを重複素とする重複形容詞はほぼ(d)に属する、とすることができる。

そしてまた、(a)(b)において重複素の末音節がイ列のもののないこ

とが、改めて注意される。(a)(b)は単独形容詞(Xシ)の例のあるものであるが、単独形容詞は基本的にク活用であり、そして、ク活用形容詞の語幹の末音節は基本的にイ列音をとらないことが指摘されているものである。^⑩

また、同じく(a)(b)において重複素の末音節がエ列のものも先にも見ないようにケケシ・オホヤケオホヤケシの二例であったが、後述するケケシを含めてこれに対する単独形容詞ケシ・オホヤケシはいずれもシク活用であることが注意される。すなわち、語幹の末音節がエ列音をとるク活用形容詞は語幹が一音節のもの(例、エシ)やケシ型のもの(例、ハルケシ)などかなりの例があるが、それらに対する重複形容詞(Xxシ)は先の(i)(ii)(iii)の範囲において存しないということがある。尤も、時代を下るとタケダケシ・シゲシゲシ・スネスネシの例があってそれらに対する重複形容詞が全く存しない訳ではないが、範囲を広げても、語幹が一音節のものおよびケシ型のものに対しては、重複形容詞(Xxシ)も、さらに語幹を重複したもの(Xx)も見出だすことができない。語幹の末音節がエ列音をとるク活用形容詞についてはいくつかのことが指摘されているが、^⑪このことはあるいはさらに一つの特徴を加えうることになるかもしれない。

さて、(a)において重複形容詞(Xxシ)。例、ナガナガシ)は重複

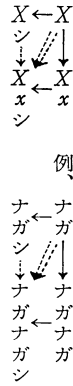
素(X。例、ナガ)を重複して接尾辞シを伴いシク活用形容詞を構成したものであるが、理論的順序としてはX↓Xx↓Xxシ(例、ナガ↓ナガナガ↓ナガナガシ)という経路が考えられる。一方、重複素(X。例、ナガ)は単独でシを伴い単独形容詞(Xシ。例、ナガシ)を構成する。X↓Xシ(例、ナガ↓ナガシ)という経路が考えられる。

ところが、(b)においては、右のX↓Xシの経路は同様であるのに対して、X↓Xx↓Xxシの経路のうちXxの例を欠く訳で、X↓Xx↓Xxシではなく別にX↓Xxシの経路をとっているかに見える。しかしながら、(b)においても重複素を重複してシを伴い重複形容詞を構成するととらえられることは(a)と変りなく、すなわち、Xxが語例として顕在化しているのと否にかかわらず、Xxシの存在において理論的順序はなお依然としてX↓Xx↓Xxシと考えられなくてはならない。そして、言わば現象上のX↓XxシをX↓Xxシと示すことにすれば、これはXxの顕在する(a)にも該当することになる。

また、(c)においては右の(a)におけるX↓Xシの経路を欠き、(d)においては右の(b)におけるX↓Xシの経路を欠いていることになる。

あるいはまた、先に述べたようなク活用の単独形容詞(Xシ。例、ナガシ)の語幹(X。例、ナガ)を重複してシを伴いシク活用の重

複形容詞（ $Xxシ$ ）。例、ナガナガシ）を構成する場合に、現象上 $Xシ \rightarrow Xxシ$ （例、ナガシ \rightarrow ナガナガシ）のように見ることが通常行なわれている。この現象上の $Xシ \rightarrow Xxシ$ を $Xシ \rightarrow Xxシ$ と示すことにすると、(a)(b)は、(b)においては Xx が顕在化していないがそれを含めて、



のように図示できることになる。

ところで、今、右のように図示する際に、 $Xシ$ はク活用、 $Xxシ$ はシク活用であることを基本として述べてきたが、先にもふれたようにその基本と異なって $Xシ$ がシク活用である例外的ものがある。かかる。

(a)(b)において、 $Xシ$ がシク活用のもの（ないしシク活用と見る可能性のあるもの）は、(a)では（スガスガシ）・（ヲサヲサシ）・（モノモノシ）・（カマカマシ）、(b)では（アダアダシ）・（オトナオトナシ）・（セハセハシ）・（ケケン）・（オホヤケオホヤケン）・（オホホン）である。^⑩

このうち、まず、カマカマシについては、カマシは本来はク活用と推定され、これから除かれるであろうと考えられる（注⑦参照）。

次に、オホホンは、シク活用形容詞の語幹の用法かと思られる。

重複形容詞の構成

ホシないしオフシを $Xシ$ とするものととらえるならば例外かと思われるものに属するが、その際も語幹の用法の例だけであって、次のスガスガシ・アダアダシと括って考えられることになる。それに、右のようにはとらえず（注⑧参照）例外から除かれる可能性もある程度あると思われる。

スガスガシ・アダアダシは、スガシ・アダシに語幹の用法かと思られる例しもなく、右のように考えた場合のオホホンも含めて、必ずしも積極的に $Xシ$ がシク活用であると見るものではない。^⑩特にアダシは、アダ（徒）とアタシ（他）との混濁によるものと見られ、形容詞として確立していると言えるかどうか難しいところのあるもので、アダアダシはあるいは(d)に分類されこれから除かれるものかもしれない。

また、ヲサヲサシ・オトナオトナシ・モノモノシ・オホヤケオホヤケンについては、重複素（ X ）が名詞として用いられるもので、重複素である名詞（ X ）が接尾辞シを伴いシク活用形容詞（ $Xシ$ ）を構成する訳であるが、これらは別個に考える必要があろう。すなわち、 $X \rightarrow Xシ$ （ク活用）のものと $X \rightarrow Xシ$ （シク活用）のものとを比べてみた場合に、前者は、例えばナガシ \rightarrow ナガシにおいて、ナガシもナガシも情態を表わすものであるのに対して、後者は、例えばヲサ \rightarrow ヲサシにおいて、名詞ヲサの属性を抽出してそれを情動的に表

わずものであって、その表わすところにおいて、前者は形容詞の語幹(X)と形容詞(Xシ)とがあたかも一体的であり、他方、後者は形容詞(Xシ)が名詞(X)から言わば二次的に派生されたものように思われる。しかも、後者の形容詞(Xシ)は、ヲサシ(宇津保物語)、オトナシ(蜻蛉日記・源氏物語など)、モノシ(蜻蛉日記・枕草子・源氏物語)、オホヤケシ(枕草子)のように、いずれも上代の用例を見ないものである。してみれば、X↓Xシ(ク活用)のものとはX↓Xシ(シク活用)のものとは性格を異にすると言わべく、X↓Xシ(シク活用)の経路はX↓X_シ↓X_シの経路とは別にとらえられなければならない、Xシ(シク活用)↓X_シのように見ることはできないものと言わべきであろう。図示すれば次のようにならう。



さらにケケンであるが、先には後述するとしてきたが、これについては右に見てきたような説明ができない。これを、例えば『大言海』のように「異しヲ重ネタル語ナリ」ととらえる限り、例外になるかと思われる。しかしながら、『岩波古語辞典』には「(け)異(け)し」の意か」とあってこれに従うならばケケシは重複形容詞そ

のものから除外され、あるいは『日本国語大辞典』は『大言海』の説に対して『河海抄』『仙源抄』で、「賢賢」「堅々」の漢字をあてていることから考えて疑問が残る。」としていてこれを敷衍するならばケンともにとらえないことになり、いずれにしても例外には属さないことになる。

さて、残るはセハセハシのみであり、これも右に見てきたような説明のできないものであるが、これについてはこれと連関するセバシ・セバセバシ・セハシなどとも節を改めて検討することにした。

一一

重複形容詞セハセハシは、それに対する単独形容詞セハシがク活用ではなくシク活用である点で、特異な位置を占めるものである。セハセハシについて考えようとする時、これに類似のものとしてのセバセバシについても合わせ考えない訳には行かない。重複形容詞セバセバシは、これに対する単独形容詞セバシが、他のもの(例えば、ナガナガシに対するナガシ)と同様に、ク活用のものである。以下、重複形容詞セバセバシ・セハセハシについて、それらに対する単独形容詞セバシ・セハシにもふれながら考えて行きたい。なお、第一節では上代・中古の範囲で考えてきたが、用例が必ずしも多く

ないことを考慮して、この節では範囲を中世まで広げて検討することとしたい。

さて、セバシはク活用、セハシはシク活用であり、別稿(一)「対義語ヒロシ・セバシとその周辺」(二)「セハシ(シク活用)覚書」でふれたように、セバシは空間が狭く余裕のない意を、セハシは時間が切迫して余裕のない意を表わすものであった。これに対して、重複形容詞セバセバシ・セハセハシはともにシク活用のものである。

セバシとセハシとは清濁と活用において違いがあり形態上の差違がほぼ明らかであるが、セバセバシとセハセハシとはともにシク活用であるので、清濁が明らかでない例においては形態上の識別が困難である。

辞書の類の例は、清濁は明らかかなものもあるが、意味の点では必ずしもはっきりしないものが多い。

約(略)セハシ(小平・?)○(略)(名義抄図書寮本)

約(略)セバシ(小平・○○○)(略)セハシ(小平○○○)(略)(同観)

智院本)

約(略)セバシ(節用集易林本)

名義抄図書寮本の例および同観智院本の後者の例は清音の例と見られ、同観智院本の前者の例および節用集易林本の例は濁音の例と見られる。その他、色葉字類抄・伊呂波字類抄・節用集饅頭屋本・

同黒本などに「約」字に対して「セハシ」などがあるけれども清濁は明らかでない。節用集文明本に「約」字に対して「セワシ」とあるのはセハセハシがハ行転呼した例と見られる。

右の他のセバセバシ・セハセハシの用例を、清濁の明らかでないものも含めて、意味の上で仮にいくつかに分類して次に挙げてみる。まず、セバセバシ(ないしセバセバシと考えられるもの)の例を示す。

(1) 房中 小々トセハシ(遊仙窟真福寺本)

道狭シウテ兩方カ險阻テ難處チヤホトニ(史記抄)

此間ハ南方ノセハシキ衷中ノ荒陞ノ地ニ居テアルカ(四

河入海)

樂天ハ區々トセハシウノ仙佛ヲ分別ノニ見ルソ(同)

これらは、いかにも狭い意に用いられているかと思われる。史記抄の例は、『抄物資物集成』の「史記抄索引」や『日本国語大辞典』に従ってセバセバシと訓んでおく。四河入海の後者の例は、いかにもこまごまとしている意かと思われるが、狭い意の一種としてここに挙げておく。

(2) 詞約(ヒト)(リ)テ(ヒト)下欄「セハシクシテ」(而)理弘シト雖(モ)、

(興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝承徳三年点・築島裕氏釈文)

これは、ことがいかにも短い意に用いられており、空間が狭い

意に引き比べられる。

- (3) 縦たてひ高位たかいに昇のぼるとも、身を約たづしくもてなし（源平盛衰記七 成親卿流罪事）

これは、つつしみ深い、ないし、儉約の意に用いられている。

- 例えば先に挙げた名義抄や節用集などの「約」字の項にはセハセハシ・セバセバシなどともに「シママヤカ」の訓もあって、これらの意味の上で連関するものとしてとらえることもできるが、右の(2)(3)の例の意味はほぼツツマヤカの表わすところに相当する。

- (4) 広タトシテセハシウナケレハ人カ婦服スルナリ(論語抄)

Yōjina cunio volamuru monoua xebaxebaxu xiteua cana naru. (天草本金句集)

これらは、心がいかに狭い意に用いられている。(1)~(4)に挙げたものの中で濁音の確例は天草本金句集の例のみである。

次に、セハセハシ(ないしセハセハシと考えられるもの)の例を示す(セハセハシがハ行転呼してセワセワシとなったと見られるものを含めて示す)。

- (5) 晝ルハ、蟬モセハシク、カシマシク、鳴クモノナルガ、
(中華若木詩抄上新涼)

世間ノ事カ諸事セハシクナル程ニ(四河入海)

Xeuaxenaxij coto nomi casanari yugu. (日葡辞書)

日葡辞書の例には「厄介な事、煩わしい事が次第に増して行く。」との説明がある。これらは、煩わしい意に用いられているものを含めて、いかにも忙しい、時間の余裕のない意を表わしていると考えられる。

- (6) 胸襟ノセワシキモノハカウハニ云マシキノ(四河入海)

Xeuaxenaxij: hito. (日葡辞書)

日葡辞書の例には「しみったれでこせこせしており、その態度のいやらしい人。」との説明がある。これらは、心に余裕のない意を表わしていると考えられる。

また、セバセバシ(4)とセハセハシ(6)とはその表わしているところの意味はほぼ変わらないのではないかと考えられる。そして、(4)とも(6)とも必ずしもはつきりしない例として次のようなものがある。

婦カセハシケレハ夫ノ心モワルイカ(四河入海)

セバセバシとセハセハシの意味は右のように一部重なるところもあるようであるが、セバセバシはセバシと、セハセハシはセハシと意味の連関性が強いとするならば、セバセバシは空間が狭く余裕のない意を、セハセハシは時間が切迫して余裕のない意を表わすことに傾向すると見てよいであろう。このように考えて右の用例を改めて見てみると、セバセバシは(1)(ないし(2))の意味が、セハセハシは(5)の意味が中心なものであると見ることができよう。そして(4)

とは(6)とほぼ意味の変わらないものであったが、(4)は精神的な空間の余裕のないことについて、(6)は精神的な時間の余裕のないことについて言うものとしてあり、空間についてであれ時間についてであれ精神的内面における余裕のなさは截然と区別できるようなものではなく、この意味の点についてはセバセバシとセハセハシの区別は必ずしも明確なものではなかったと考えられよう。なお、(3)は精神的な意味を持ちつつ依然として空間を表わすところの見られるもので、(1)と(4)との中間的な位置にあると言える。そして、(1)（ないし(2)）の意味に代表されるセバセバシと(5)の意味に代表されるセハセハシとは、その表わすところの異なりを持ちつつも、セバシとセハシの意味の共通性と同様に共通するところのあるものと言わなければならぬ。

ところで、これまでセハセハシを重複形容詞として取り扱ってきたが、果たしてそれでよいであろうか、その点について再検討しなければならぬ。

第一節(a)(b)に挙げた重複形容詞は、単独形容詞がク活用なのは、重複素(X)が形容詞の語幹の用法と呼ばれる用法を持ち、同じくシク活用のものも、シを含まないいで語幹の用法とは呼ばれないがほぼ同様の用法に立つものである。ところが、その中で唯一セハセハシの重複素セハは、その重複の例を除いて、そのような用法に一

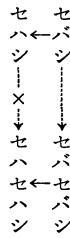
切立たないのである。

例えば、重複形容詞セバセバシの重複素セバは、これは単独形容詞セバシの語幹であるが、いわゆるミ語法に立ったり、接尾辞ゲ・ムを伴って前者は名詞に、後者は動詞にあらわれた(別稿(一))。他に、セバサ「ほどもなきせばさなれば」(枕草子)のように接尾辞サを伴う例や、セバヂ(狭路)「わきもこかせはちにちかふ移香の」(従三位頼政卿集)など名詞を伴い複合名詞を構成する例もある。

これに対して、セハセハシの重複素と見られてきたセハは、その重複の例を除いて右のような用法に立つことはなく、右のような用法に立つのはセハではなくシク活用形容詞の語幹としてのセハシであり、セハシサ「^⑤Xenaxisa」(日葡辞書)や、いわゆる「甚し」をとるナシ型のセハシナシ「草の庵いほのせはしなき、旅寐よの床とこぞ物うき／＼」(謡曲安達原)などの例がある。

従って、セハセハシから重複素セハを抽出して考えることはできるものの、そのセハを重複して重複形容詞セハセハシを構成するというように考えることには些か疑問があると言わなければならない。この疑問に、第一節で見たようなセハセハシの特異性を合わせ考えると、セハセハシについては他の重複形容詞と別のとらえ方をする必要があるのでないかと思われる。

別のとらえ方とは、セハシ→セハセハシだけで考えるのではなく、セバシ→セバセバシとともに考えることである。すなわち、セハセハシをセハの重複とするよりも、セバセバシの子音交替ととらえるのである。セバシとセバセバシとの関係は現象上セバシ→セバセバシととらえられ、セバシ→セハシは、バ行→ハ行の子音交替として、同様にセバセバシ→セハセハシも子音交替としてとらえるならば、いくつか疑問のある現象上のセハシ→セハセハシを考えなくてもよい訳である。セバセバシとセハセハシとの意味の共通性を改めて想起したい。図示するならば次のようである。



ところで、残念ながら右の考え方には一つ問題がある。それは、先の(イ)(ロ)の範囲には見当たらないが時代を下るとセハセハの例があることについてである。

なにをおしやるぞせは〜と(閑吟集)

Xenaxeua. *Adverb.* (日葡辞書・補遺)^⑧

セバシ→セハシ、セバセバシ→セハセハシの子音交替ならば、同様にセバセバ→セハセハと考えればよさそうであるが、そのセバセバの例が見当たらないのである。

この点については、第一節(a)(c)のような重複形容詞から類推され

てセハセハが生じたのではないかと考えている。類推というのは些か安易な考え方のようでもあるが、セハセハの例が時代を下ることも考慮してのことである。そしてまた、現象上のセバシ→セバセバシにおけるセバ→(セバセバ)→セバセバシの顕在化していないセバセバを考えることによって、類推される根拠もまた考えやすいのではないかと思われる。

三

これまでに重複形容詞に対する単独形容詞はク活用ものが基本であることを中心として述べてきた。単独形容詞がシク活用のもは、重複素が名詞として用いられるもののようにシク活用の単独形容詞を二次的に派生したものであるなどの事情があったり、あるいはセハセハシのようにセバセバシの子音交替としてあるものであった。

さて、これら重複形容詞と前稿(二)に見た重複動詞(注④参照)とを比べてみると次のようである。

重複動詞は、重複素が一音節のもの(例、トドム)と、縮重複や一部重複のものとしての重複素が二音節のもの(例、イヌスク、ツラク)しかなかった(前稿(一)・(三)参照)が、重複形容詞は、重複素が一音節のもの(例、ユユシ)、二音節のもの(例、ナガナガシ)

にとどまらず三音節のもの(例、オトナオトナシ)、四音節のもの(例、オホヤケオホヤケシ)まである。縮重複や一部重複の重複形容詞は、重複素が二音節の縮重複のものに例がある(例、イトドシ)が、一部重複のものには(f)(f)の範囲においては例が見られない。

また、重複素の末音節について見ると、重複動詞では基本的にア列・ウ列・オ列であった(前稿(二))が、重複形容詞ではとりわけ第一節(d)のようにイ列・エ列のものも多く、それらは重複素が名詞や動詞(連用形)のものが多かった。

このことは、動詞の構成と形容詞の構成との差、すなわち、動詞における語幹と語尾との緊密度と形容詞におけるそれとの差を表わすものであろう。後者は前者に比べて緊密度が緩く、三・四音節のものや、名詞や動詞(連用形)のものが多く末音節がイ列・エ列のものを、重複形容詞の構成要素(重複素)となしうるのではないか、重複形容詞の構成力はそのようなものであったと考えられる。

(一九八〇・九)

注① 萬葉86 (1974・12)

② 親和国文10 (1976・2)

③ 論集日本文学・日本語1上代 (1978・3角川書店)

④ このことよって、前稿(二)において考察したところの重複して動詞化接尾辞を伴い動詞を構成したもの(例、トドム)を重複動詞と、また、それに対して重複素が単独で動詞化接尾辞を伴い動詞を構成した

重複形容詞の構成

もの(例、トム)を仮に単独動詞と、それぞれ呼ぶことになろう。

⑤ 川端善明氏『活用の研究Ⅱ』(1979・2大修館書店)第二部第五章 第一節

⑥ このような基準としたことよってフルブルシ(枕草子)・ヨソヨソシ(狭衣物語)・ワザワザシ(蜻蛉日記など)等は挙げないこととなつた。なお、付記参照。

⑦ スガシガシはスガシ(Xシ)の例が語幹の用法の例(スガシ女)のもの、ヲサヲサシはヲサシ(Xシ)の例が宇津保物語にあるもの、モノモノシは意味するところは多少異なるものながらモノモノ(Xシ)の例が東大寺諷誦文稿にあるものである。カマカマシは、カマシ(Xシ)が、単独で用いられた例が見当たらずク活用かシク活用か問題のあるものであるが、ク活用形容詞の語幹の用法と見られるアナカマの例からク活用であったと推定されるものである。『岩波古語辞典』が引くところの「さままゝ^ま耳かましま^ままでの御祈りども」(栄花物語)の例はシク活用であるが、「^ま耳かましま^ま」(色葉字類抄黒川本)の例と合わせ考えると必ずしも単独で用いられた例とは言い難いかと思われる。

⑧ アダアダン^まはアダシ(Xシ)の例が語幹の用法の例(アダシ野など)のもの、セハセハシはセハシ(Xシ)の例が堀河百首にあるもの、オホヤケオホヤケシはオホヤケシ(Xシ)の例が枕草子にあるものである。オホホシは、その清濁が明確ではなく、オボホシ・オボボシなどとすると説もあり、オボ(臍)とともにとらえるならば(d)に分類され、オホ(多)とともにとらえるならばク活用形容詞オホシ(多)をXシにとらえるならばシク活用形容詞の語幹の用法かと見られるオホシないしオフシ「^ま凡海^{於布之}安末」(和名抄高山寺本)をXシとするものと考えられる。

- ⑨ シラジランはシラジラ(X₁X₂)の例が今昔物語集にあるもの、コトゴトシは意味するところは多少異なるものながらコトゴト(X₁X₂)の例が東大寺諷誦文稿にあるもの、ワキワキンはワキワキ(X₁X₂)の例が舒明紀北野本にあるもの、ホレホレシはホレホレ(X₁X₂)の例が夜の寢寛にあるものである。ユエユシはユエユエ(X₁X₂)の例について『源氏物語大成索引篇』が「誤写ヲ疑ヒ得ル用例」としているものである。
- ⑩ (a)のスガスガシと(d)のソガソガシ、(b)のカルガロシとカロゴロシ、(d)のウヤウヤシとキヤキヤシ、タツタツシとタドタドシはそれぞれ母音交替の関係にあり、また(d)のサウザウシはサクサクシのウ音便、タイダイシはタギタギシのイ音便と考えられるもので、それぞれそれら一つに数えれば、(b)は14例、(d)は48例となる。
- ⑪ ワキワキンのイ音便と考えられるワイワイシの例が「亦有辨ワキ、シヤ、オ」(推古紀卅四年岩崎本)など日本書紀古訓にあるが、必ずしも上代の例とすることはできないであろう。
- ⑫ 重複素が名詞のものとして、ヨシヨシシ・カヒガヒシ・ナサケナサケシ・クセグセシ・ムネムネシ・メメン、同じく動詞(連用形)のものとして、スキズキン・ツギヅキン・カケカケシ・ホケホケシ・ハエバエシ・ナレナレシ・ハレハレシ・オレオレシ・シレシレシがある。
- ⑬ 北原保雄氏「形容詞のウ音便——その分布から成立の過程をさぐる——」国語国文36—8(1967・8)・「形容詞『ヒキン』攷——形容動詞『ヒキナリ』の確認——」同37—5(1968・5)・「形容詞の語音構造」中田博士 国語学論集(1979・2 勉誠社)
- ⑭ 工藤力男氏「古代形容詞の形成に関する一つの問題——スミノエとスミヨシをめぐって——」萬葉90(1975・12)・「中世形容詞の終焉」論集日本文学・日本語3中世(1978・6 角川書店)、北原氏「形容詞の語音構造」(前掲)
- ⑮ サウザウシは、以前には「さびさびしの音便」(『大日本国語辞典』)。「大辞典」『源氏物語辞典』なども同様)とされてきたが、山田孝雄氏が新撰字鏡のサクサクシの例を示しその音便として以来これが通説となっている。仮にサビサビシ説によるならば、X₁シ(X₂サビシ)がシク活用のものに属することになるが、サビサビシ説は既に斥けられており、また、以下に見るようにX₁シがシク活用のものはありません、その面からもサビサビシ説は成り立ち難いかと思う。なお、サウザウシないサクサクシが和語であることについては原田芳起氏『平安文学言葉の研究』に詳しい。
- ⑯ スガシ・アダシに語幹の用法かと思られる例しかないことについては川端氏もふれられている(注⑥に同じ)。
- ⑰ 他に、上代・中古にも用例が見られず中世に見られるものとして、先には(d)に分類したハカバカシに対するハカシ(史記抄)、ナサケナサケシに対するナサケシ(御伽草子福富長者物語)、マメマメンシに対するマメン(増鏡・中華若木詩抄・日葡辞書)、マメマメンシに対するマメン(増鏡・中華若木詩抄・日葡辞書)の例がある。なお、マメンの例が中華若木詩抄・日葡辞書にあることについては、佐藤喜代治氏「近代の語彙——講座国語史3 語彙史(1971・9 大修館書店)に指摘がある。
- ⑱ 萬葉104(1980・7)
- ⑲ 親和女子大学研究論叢14(1981・2)
- ⑳ この他にシク活用のセバシと説かれるものがあるが、それについては別稿(二)で述べた。
- ㉑ 柳田征司氏の御教示によると、京大本に「セハ〜」の振り仮名が付されているとのことである。
- ㉒ 『岩波古語辞典』にはこれを古活字本からセハセハシの例として引くが、小林賢次氏「清原宣賢系論語抄について——書陵部蔵「魯論

抄』の本文の性格をめぐって——」近代語研究5 (1977・3 武蔵野書院) によれば、書陵部本には「セハくシウ」、足利本には「セマくシフ」とあって、足利本の例との関係や「広々トシテ」との関係を考える時、セバセバンの例とすべきものと思われる。

㉘ 『邦訳日葡辞書』の訳による。なお、ロドリゲス日本大文典にも同じ例文があり「客物語」(Quiauo Monog.) と出典の注記がある。

㉙ 『邦訳日葡辞書』の訳による。

㉚ この他に、(1)く(6)に分類しにくいものとして

隘ハ狭隘ソ セワくシキヲ云ソ (四河入海)

(君) 不^{シラレ}約^シ 己^{シラレ} 而^{シラレ}禁^シ入^シ 為^シ非^シ (節用集文明本)

のような例があり、セハセハンがハ行転呼した例と見られるもの、前者はセバセバンの(1)と、後者は同じく(3)とほぼ同様の意と考えられる。

㉛ 西宮一民氏「いわゆる『甚し』について」論集日本文学・日本語1 上代 (1982・3 角川書店) 参照。

このいわゆる「甚し」をとらない形容詞とする形容詞とが対応を持つものは、アラケン→アラケナン、ウシロメタン→ウシロメタナシのようにク活用形容詞である前者の語幹にナシがついて後者が構成されており、同様にシク活用形容詞の語幹セハンにナシがついてセハンナシが構成されていると考えられる。

㉜ ロドリゲス日本大文典にも副詞の例として「Kouarain」が挙げられている。

㉝ ここに重複形容詞・重複動詞に対比されるべき重複名詞を考える必要が生じよう。考えられるものとしては、ササナミ・ツラツラツバキのように名詞を伴い複合名詞を構成するもの(前稿(一)・(二)や、これとともにとらえられるものとして縮重複ないし一部重複のアラマツバラ(前稿(三))があり、また、モロモロのように独立して名詞にあら

重複形容詞の構成

われるもの(前稿(一)や、これとともにとらえられるものとして縮重複のウツツ(前稿(一)・(三))および一部重複のキララ(前稿(三))などがある。これらは例が多くなるが未だはつきりしたことは言えないように思われるが、重複名詞をならんかの形で考えることはでき、重複名詞・重複動詞・重複形容詞をともに考えて行く方向性は確認できるのであろう。

㉞ それぞれ縮重複動詞、一部重複動詞と呼ぶことができよう。

㉟ それぞれ縮重複形容詞、一部重複形容詞と呼ぶことができよう。

(付記) (イ)の範囲以外他に気づいた重複形容詞として、ヤムヤムシ

(東大寺諷誦文稿)・ワイワイシ(石山法華経安養平安中期点・推古紀岩崎本)・モチモチシ(書理園金剛波若経集驗記・ツギテツギテ

シ(東大寺諷誦文稿)・カヘカヘシ(推古紀岩崎本)・リヤウリヤウシ(宇津保物語・枕草子)の例がある。

また、同じく(イ)の範囲以外のものとして、一九八一年五月二

四日国語学会における東郷吉男氏の研究発表「中古における語幹重複型の形容詞について」の当日配布の「資料」によると、ノロノロシ(夜の寝覚・栄花物語)・ナマナマシ(大和物語)・アリアリシ(宇津保物語)・ササシ(栄花物語)・サマザマシ(大鏡)・サメザメシ(夜の寝覚)・チカラチカラシ(落窪物語)・トガトガシ(堤中納言物語)・ニブニブシ(狭衣物語)・ソロソロシ(宇津保物語)・キララン(高野山大学 蘇悉地羯羅経承保元年点)・シブシブシ(院藏妙法蓮華経平安後期点)の例のあることが知られる。

さらに、東郷氏当日配布の「資料」によって名義抄観智院本のムヤ、ムシの例はヤムヤムシの誤りかと思われることを知った。とするならば、ヤムヤムシは(イ)の範囲に入り、(d)の例に加えられることになる。また、キラランの例があることよって、(イ)の範囲以外では一部重複形容詞の例のあることが認められる。